

「ヤレマア、お主の所で御座んすか」

「なんや、お主……妙な物云ひをしよるなア、不細工な女やで、人三化七と云ふのやなア。なに、あんな女に飯を炊いて貰ふたら不味ふて喰へん……何に斷りを……よし。あのウ女中さん、折角來て呉れたんやが、俺し所に一人頼んだる娘があるのや、その娘が縁がなかつたら、あんた來て貰ふよつてに、今日のところは去んでんか」

「ハア、そら去ねと云ふても納まらんぞ」

「そらなにを云ふね。納まつても納まらいでもやなア、こつちに一人頼んだある娘が有るよつてに歸つてと云ふのや」

「そら去ねと云ひよつたら、去なん事はないが、わし去の所が判らんで、送つて呉れんか、こら……」
「そう、こら……云ふな、けつたいな奴な、これ丁稚、チョツト此の女中、口入屋まで送つて遣つて呉れ」

「其の小まげな子でいかん、今小まげな子が來よつて間違ひが出來たのやで、その大きな奴、五、六人して送れ」

「阿呆云へ、このいそがしいのに」

「アノお店でわあ……云ふてゝやのは、なんやね。なに、女中さんが來て呉れはつたのか。女中さん

の事ならお店で構ふて貰はいでもえゝ、そこのお娘、かまへん、こつちへ這入り、だんない、お這入り」

「ハイ、おゆすし、こら御當家のおへさんでござんすか、なにぶん宜敷御たのみ申しますでの——」
「まあ、妙な物云ひやこと、今お店で云ふてやつた通り、こつちに一人頼んだある娘があるのん、けども私し處の内、一人や半分餘計になつても、かまへんのん、しかし後のけんかを先に仕とくが、内は給金が安い、コレ、三兩、おまへなにか、一年三兩で辛抱をして呉れてか」

「ハイ……私し給金がほしいて奉公するんぢやがせん。わしんとこの村に、大池の長三郎と云ふ男、貴女は知つとるか」

「お前はんが、何處の人や知らんのに、そんな人は知らんがナ」

「知りよらんかな……その長三郎が、吐きよつたには、お前のやうな者が、大阪さまで三日の日でも奉公が出來たら、立てた柱に花を咲かすと、吐きよつたから、私し三日が五日が十日が半月が、半期が一年が、五年が十年が二十年でも辛抱して國へ歸つて、そのたてた柱に、花を咲いて見たいでお鍋、どうせい、こうせいと云ふて貰へば給金の處は三兩が五兩でも辛抱するでの……」

「阿呆らしい。なんのそないに出せる物かいなア」

何も縁の物やでと、これから居付きましたが、根が田舎の人で働く事にかけてたら、他の人より宜う